

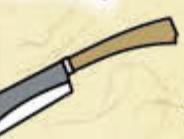
# 奈良のむかしばなし

第十九話

文・山崎しげ子

## 黒淵の乙姫淵

くろぶち  
おとひめぶち



### 乙姫淵

バス専用道の衣笠トンネル出口(黒淵側)の橋の下にある。  
昔の面影がないのが残念。

奈良県の中央西、五條市の西吉野町。緑の山並みがどこまでも続き、鳥のさえずりも清々しい静かな山里だ。村を南北に流れる丹生川は、今は二メートルほどの川幅ながら、蛇行しているため、川に沿つて昔は「淵は四十八淵」といわれたくらい淵が多かつた。

その一つ、黒淵。流れの底が深く、水量豊かで淵が黒々としていたことからこの地名がついたという。かつてはここに大蛇が棲み、弘法大師の力を借りて退治したとの伝えも残る。その黒淵にも淵をかき干したところ、三日目に

大雨が降ったという。

黒淵のその乙姫淵。実は、昭和四十四年に完成した道路建設の影響で土砂が堆積し、淵が浅くなつて景観は大きく変わつた。地元の古老の話では、「かつては擂鉢状の深くて大きな淵だった。子供の頃は泳いではいけないといわれていた」そうだ。

とはいって、古老が細い道を通つて案内してくれた今も残る乙姫淵は、緑がかつた青色の水面が五月の陽光にきらきらと輝き、その底に不思議な世界を秘めているような美しさであった。早魃に悩まされた当時の人々が、そこに竜宮や乙姫の話をふと夢見たのも、なるほどとうなづける。

昔、大日川という所に住んでいた音右衛門が、どうした弾みか、鉈を淵に落としてしまつた。拾おうとすぐに飛び込んだが、それっきりとうとう浮かんでこなかつた。

家ではもはや死んだものと諦めていたが、一年がたつた一周忌の日、ひょっこりと無事に帰つてきた。そして彼が話したことは「浦島太郎」の物語とよく似ていた。

淵の底には竜宮があり、落とした鉈は床の間に飾つてあつた。そして、彼が竜宮を去る時、乙姫は「旱の時はこの淵をかき干すとよい」と教えてくれた。それ以来、雨乞いの時は、淵をかき干してからっぽにすると、大雨になつたとい伝えられている。現に、明治のころにも淵をかき干したところ、三日目に



南北朝時代、京の都を追わされて吉野へ向かう後醍醐天皇を手厚くもてなした邸宅は、その後、後村上(ごむらかみ)、長慶(ちょうけい)、後亀山(ごかめやま)天皇の皇居に。ひっそりとした佇まいは、南朝の美しい歴史を刻んでいる。

(見学は、事前の申込が必要。0747-32-0730 堀家まで)

### 物語の場所を訪れよう



「黒淵の乙姫淵」へは…

【車の場合】国道24号線五條市本陣交差点より

国道168号線で一津川方面へ

【バスの場合】奈良交通五條バスセンターより黒淵バス停下車

徒歩約10分(便数が少ないので注意ください)

【五條市西吉野支所 地域振興課 0747-33-0301】